

# 風

第81号  
2014年4月

発行  
群馬県生協連女性協議会  
群馬県前橋市大手町3-19-3  
「風」はホームページでもご覧いただけます  
<http://gunma.kenren-coop.jp/>  
Eメール: mail@gunma.kenren-coop.jp

## 第91回国際協同組合デー記念交流集会に参加 3月6日(木) フートピア21が開催 富岡製糸場と絹産業遺産群を視察

フートピア21主催の「第91回国際協同組合デー記念交流集会」が3月6日(木)開催され、今年6月に世界遺産登録を目指す富岡製糸場と絹産業遺産群を見学しました。(「フートピア21」は群馬県生協連、JA群馬中央会、県森林組合連合会、県漁協で構成し、県内の協同組合間連携を深める活動などを行っている組織です)



フートピア21の藤井事務局長が挨拶



富岡製糸場

富岡製糸場ではボランティアガイドの高橋さんに案内していただき、ユーモアを交えた詳しい説明に、私たち参加者は皆その歴史的な価値をあらためて認識することができました。

最初に目にしたのは、140年前に建築され関東大震災や東日本大震災にも耐えた赤煉瓦(木骨レンガ造り)の巨大な建物でした。フランス人技師の指導を受け、資材の大半を地元で調達し日本の大工職人によって建てられた群馬が誇る建物です。

富岡製糸場は、フランスの最新技術を導入し日本初の大規模官営製糸工場として生糸を通年生産し、西欧諸国に良質で安価な絹を供給したことによって、それまで庶民には高嶺の花であった絹製品を誰にとっても身近な存在にし、生活や文化を豊かに変えた功績が

第一に評価されるどころだそうです。

富岡製糸場が世界遺産として評価される第二の理由は、器械製糸に携わる工女の教育を通して日本各地の絹産業化を支えたという側面でした。藩閥政府の命で全国から集められた工女は、フランス人の女性教師から指導を受け技術を磨くと、ある者は1等工女として後進の教育に当たり、ある者は郷里に帰って製糸工場建設の指導や教育に携わったり



して日本の絹産業を支える役割を果たしました。下は9歳から集められた工女は、暑く臭い仕事場での立ち仕事を24時間操業・2交代でこなす重労働であった反面、90分ごとに休憩がとれ、場内にある無償の寄宿舎や診療所を利用す



自動製糸機が並ぶ場内で

ることができ、今の価値で4～5万円の賃金を得ていたそうです。



コープ藤岡店で見学前に説明を聞く

途中コープ藤岡店に立ち寄り、田口店長からお店の概要について説明を受け、昼食のあと店舗を見学しました。今年で8年目をむかえたコープ藤岡店は売場面積450坪。車の便が良いため、若い世代の来店客が多いそうです。魚介類を築地直送で仕入れ、スーパーでは珍しい鮮魚対面販売に感激しました。農産コーナーは地場野菜を取り入れ地産地消を進めているそうです。供給高は3年連続伸長とのこと。

次の視察先は高山社跡（藤岡市高山）です。明治16年、高山長五郎が、通風と温度管理を調和させた「清温育」という蚕



の飼育法を確立（蚕室を温めて飼育）、養蚕農家建築の原型となりました。この技術を普及するため翌明治

17年に養蚕教育機関・高山社を設立。多くの社員・生徒を育てました。国内だけでなく外国（中国、朝鮮）からも多くの生徒が学び「清温育」による養蚕技術を各地に広める役割を担ったことなどが、絹産業遺産群としての評価に繋がったのだと思います。



一部が残る高山社跡



田島弥平旧宅

最後に私たちは田島弥平旧宅（伊勢崎市境島村）を訪ねました。群馬県ですが利根川の対岸に広がる島村地区は、明治初頭には世帯数280戸ほど、うち80%が蚕種（さんしゅ：蚕のタマゴ）製造農家、あとの20%は船頭だったといえます。田島弥平が考案した養蚕（蚕種）法は「清涼育」（換気を重視）といって、屋根に櫓（やぐら）と呼ばれる換気窓を備えているのが特長で、こちらも近代養蚕農家建築の原型となっているそうです。品質の良い生糸の大量生産を可能にした技術革新など世界に大きな影響を与えたことが絹産業遺産群として認められようとしているのではないのでしょうか。

この見学を通して富岡製糸場と絹産業遺産群（高山社・田島弥平旧宅そして荒船風穴）がなぜ連携して登録申請されているのかがよく分かりました。強風の吹く寒い一日でしたが、今回の企画に参加してその寒さを吹き飛ばすほどの収穫がありました。群馬が誇る世界の“たからもの”をあなたの目で見て学習してみませんか！



編集委員 秋山ユミ子（生活クラブ生協）

## 2014年消費者まつり中止のお詫び

2月16日（日）に予定していました2014年消費者まつりは14日から15日未明にかけて降った大雪のため中止となりご迷惑をおかけいたしました。

## 第2回中央地連「男女共同参画懇談会」報告 2月19日(水)

第2回中央地連「男女共同参画懇談会」が2月29日(水) コーププラザで(渋谷)で開催されました。今回は都合により参加できませんでしたが、中央地連のニュースから抜粋して紹介させていただきます。

学習講演では「アステラス製薬におけるダイバーシティ推進に向けた取り組み」と題して、同社人事部制度企画グループの矢野章作さんに話を聞きました。人的資源の充実をアステラスの最重要課題の一つと位置付け、男性偏重の組織構成からの脱却や女性育成のメンタリングなどワークライフバランスの取り組みをはじめ、ダイバーシティに対する新たな「風」を起こすために社長直轄のプロジェクトを立ち上げて取り組んだ経験が話されました。参加者からは「トップの意識、明確なビジョン、推進体制の整備が男女共同参画の推進に不可欠であることがわかった」などの感想が寄せられました。



内閣府男女共同参画局の松久保大作さんから「女性の活躍による企業・組織の進化」と題し報告をいただき、日本が抱えているさまざまな問題を乗り越えるべき課題のひとつとして男女共同参画があることや、ダイバーシティは企業のさらなる競争力向上のために必要な企業戦略であることなどをわかりやすく説明いただきました。

グループ交流では、生協で「男女共同参画」が進むことでどのような効果、メリットが生まれるかなどが話し合われました。

県連事務局 関 宏

## 福島復興支援活動の学習交流会を開催 現状を知り、これからの支援について考えました

3月17日(月)

県連は災害対策協議会と共催で3月17日(月)、「福島復興支援活動学習交流会」を開催し、組合員、役職員45名が参加しました。

第1部では3生協から報告を聞き、復興支援活動について交流しました。

- ① 利根保健生協「福島復興支援活動の報告」 細田直行さん
- ② パルシステム群馬「復興支援取り組み報告」 村上哲彦さん
- ③ コープぐんま「東日本大震災復興支援の取り組み」 松本勉枝さん



福島県連専務理事佐藤一夫さん

第2部では「東日本大震災から3年～復興に向けた福島県生協連の取り組み～」と題して福島県生協連の佐藤一夫専務理事からお話をお聞きしました。

原発事故から3年たった今も、生活環境の変化や先の見えない深刻な状況が続く中で、避難生活へのストレスにより高齢被災者が体調を悪化させている問題や、子供を連れて自主避難したママ達が自己肯定感を失っている状況、子どもたちの中には抑うつ、集中困難、不安・恐怖などのストレスが増え深刻なことなど、報道では伝わってこない実態を知り、驚きを越えるものがありました。そうした中で、福島県生協連が取り組んでいる福島子ども保養プロジェクトや、風評被害・偏見との闘いなどが報告されました。

佐藤専務理事の「福島を忘れないで欲しい」という言葉にどう応えたらよいのか、考え行動することが参加した私たちの責務ではないでしょうか。

県連事務局 関 宏

### 群馬中央医療生協

#### 「無料低額診察」について

当生協では、生計困難な方が経済的理由によって、必要な医療を受ける機会が制限されることのないよう、無料または低額な料金で診療を行う事業として「無料低額診療」を2011年7月から実施しています。

この事業は社会福祉法に位置づけられている生活改善までの一時的な措置です。公的な制度や社会資源の活用、生活改善の方向をみつけ生活再建を一緒に支援しています。

この事業を行っている事業所は前橋協立病院、太田協立診療所、前橋協立診療所、桐生協立診療所、協立歯科クリニックです。

医療費の支払いでお困りの方や病気や障がいなどや失業・リストラなどで収入がなく困っている方、国民健康保険証の資格証明書が発行され困っている方、保険証をお持ちでない方などがいらっしゃいましたらご紹介またはご相談ください。



### 利根保健生協

#### 「保健組織活動交流集会」を開催し191人が参加

2月の大雪には泣かされましたね。雪には慣れている利根沼田でも身動きがとれずの状態でした。利根中央病院では患者さま用駐車場確保のため職員は乗り合わせ出勤が続きました。また、保育園・小学校の休校のため職員が出勤できないとの声から生協本部内に臨時保育所をつくり、女性職員が急きょ保母さんとなり10人程の子どもさんを見守るなど、なんとか職員の連携でのりきりました。

3月9日(日)は、組合員活動の25年度締めくくりとなる「保健組織活動交流集会」が191人(組合員125人、職員66人)の参加で行われ、組合員活動の報告として5演題の発表がありました。東北の震災支援が2、支部分割、たまり場づくり、ボランティア活動のとりくみについて、7分の発表時間では足りないくらいのいきおいで元気よくいきいきと紹介がされました。午後の分散会では、悩みや抱負を語り合い今後の支部活動に活かすとりくみとなりました。

